

人生をかえる一冊と出会える秋

今日は全校ビブリオバトルです。人と本をつなぐ、そんな時間になることを楽しみにしています。学級担任の先生が、自分のおすすめ本を生徒に紹介していました。

「もし私なら」と考えて2冊紹介します。

将棋の世界では先日、藤井聡太が史上初の8冠を独占し大きな話題となりました。2002年生まれなので21歳という若さです。少し前の時代（1996年）では、羽生善治が当時の全タイトルの7冠を独占した時代もありましたが、そのとき羽生善治は25歳。将棋の世界では、過去の棋譜を覚えているという記憶力が勝負を分けることもあり、若いときに力をつけて一気にトップにのし上がることがほとんどです。そして30代、40代では少しずつ勝てなくなります。そんな将棋界で米長邦雄（1943～2012、元日本将棋連盟会長、元東京都教育委員）は、「名人」というタイトルに若いときから7度挑戦し逃しましたが、49歳11か月で初めて名人となり、50代で在位した最初で最後の名人でした。そのあとに出されたのが「運を育てる（祥伝社）」でした。私はこの本を読んだときに、単に運を育てるとか、ツキを呼び込むというレベルでなく、生き方そのもの、普段の心がけ、工夫した勉強法が大切だと思いました。米長の言葉を借りると、「勝利の女神には判断基準がある」、「惜福・分福・植福の心がけ」、「知識や記憶は捨ててこそ役に立つ」、「人生の極意は運・鈍・根」、「地の気を味方にする」等があり、歴史や文化を背景にした多くの考えに共感をしました。将棋以外の勉強をたくさんされているその人間性に引かれ、当時この本に出てくる関連本をすべて読みました。この経験を通じて、様々な考えや価値観を読書によって広げることとなった一冊でした。

2冊目は青山美智子の「お探し物は図書室まで（ポプラ社）」です。青山美智子は3年連続本屋大賞にノミネートされ、とても読みやすい作品が多いです。全作品ほっこりします。「お探し物は図書室まで」は短編5話です。人生や仕事に疲れた様々な人が図書館を訪れます。21歳の婦人服販売員、35歳の家具メーカー経理部、40歳の元雑誌編集者、30歳のニート、定年退職した65歳の男性が図書館へ訪れたときに、小町さゆりという図書館司書が対応します。いつもピンポン玉みたいな丸いものに針をザクザク刺して作業をし、少し愛想も悪い感じですが、最初の21歳の女性が「パソコンの使い方が載っている本を」と頼みますが、そこで司書の小町はその女性から様々な話を聞きます。その結果、「ぐりとぐら」という絵本を渡す。そして本と一緒に、付録としてお手製の羊毛フェルトを渡します。こんな風に自分には関係ない本を紹介され不思議な感覚で図書館を後にする人の人生が変わっていくのです。子どもにとって最適な助言ができているのだろうかを考える一冊となりました。そして、将来図書館で働きたいとスイッチが入りました。

(2023.10.23)